

作品タイトル：『昭和の馬と令和の鹿』

元にした作品のタイトル：『イワンの馬鹿』

著者名：村田言

あらすじ：かつて不良だった男は、今やすっかりその鳴りを潜めて、日々真面目に働いている。だが、男を息子の遼太郎はなかなか認めず、男も男でそれは仕方がない事だと思っていた。そんなある日、男の妻の元に、息子の通う学校から連絡が入る。曰く、遼太郎がカンニングをしたというが――。

特記事項：普段ネガティブに捉えがちな馬鹿という言葉が、実は一番大事なことだったりする。そんな少しずれた教育論を持つ主人公ですが、そんな男が必死に息子と向き合う姿を通して、不器用な父親の愛情を感じてもらえたら嬉しいです。

文字数：4997 文字

夜勤明けの朝8時。その日はなかなか寝付けず、しかたなしに出てきたリビングでなんとなくテレビをつけた。そして、たまたま放送されていたドラマに、俺は釘付けになった。

それは、上流階級をテーマにしたどろどろ復讐劇で。我が子の成功のために他人を蹴落とす大人たちの醜さに、あっという間に感情も神経もそのドラマに持っていかれた。

「ひでえ」

思わず、そう呟く。フィクションだとわかっているけど、腹の奥で沸々と怒りが込み上がってくるのを感じる。落ち着け、45歳。これはフィクションだ。フィクションに感情移入するほどおまえは純粋な人間じゃなからう。そうもう一人の自分が言うのだが、なにせん、昔の血が騒ぎ立ってしょうがない。かつて散々暴れては、昭和のヤンキーだなんて言われた俺ですら、ドラマの中の卑劣さにはひどい嫌悪感を覚えた。

上流社会——。それは我が家には全く縁のない響きだ。だが、同時に、今の時間学校で勉強に励む息子の姿が、上流社会の中に迷い込んだ貧しい登場人物と妙に重なってしまう。苦労して過去の代償と向き合って、ようやく手にした幸せな家庭が、ドラマのように一瞬でぐちゃぐちゃになるのではないか。そんな不安がよぎる。それでも、大ヒット作と謳ってあるだけあって、ドラマは結局最後まで見た。

17時になると、仕事に出掛けていた妻が帰ってきた。疲れているだろうに、彼女は顔にはいっさいそれを出さない。いつものようにニコニコと愛想を振り撒いては、「今日はみかんをもらったわよ」と本日の人間関係の報酬について語っていた。

「夜ごはんは何にしようかしら」

ひと息つくこともなく、仕事着の上からエプロンを羽織り、すでにリビングに立っている妻。その小さな背中を見て、なんだかむず痒い気持ちになる。人がもってきたみかんを勝手に食いながら、気持ちを誤魔化すように、俺は彼女に尋ねた。

「遼太郎は……悪さとかしてないか？」

「悪さって……。昔のあなたじゃないんですから」

彼女がクスクスと笑って言う。

「遼太郎は頑張っているみたいですよ。この前の中間テストも学年一位だったらしくて」

「そうか」

「担任の先生も、遼太郎くんならこのまま特待生を維持できるでしょう、って言ってくださったのよ」

「そうか」

「そうかって、あなたが聞いてきたんですよ？ 全く……。今日くらい、遼太郎と話してみてもどうですか？」

「俺が帰ってきた時にはあいつは寝てるし、あいつが動き出した時には俺が寝てるじゃないか」

「ですけど……」

「それにあいつは俺を避けている」

実際、遼太郎は俺とうっかり鉢合わせするのを避けているところがある。俺が帰宅後、トイレに起きてきたであろう遼太郎が、俺がトイレの前を通りすぎるまで廊下の角でじっと待機していたことがあるくらいだ。

貧乏ながら特待生制度を利用して私立高校に通う良くできた男にとって、録な学歴のない父親なんか恥でしかないのだろう。寂しい気がしないでもないが、しょうがないとも思う。

この話は終わりだとばかりに彼女から顔を背ける。すると、物言いたげにしていた彼女も、それ以上何か言うことはなかった。

結局、妻特性のオムライスを食べた後、俺はすぐに家を出た。どうせ遼太郎も課外だとかで8時くらいまで帰ってこないのだ。だから、別に俺が遼太郎を避けているわけではない。

20時5分前。仕事場のガソリンスタンドに着くと、退勤前の後輩、山田がすぐさま駆け寄ってきた。山田は俺とは違い、頭がよく、人懐っこい。「先輩～！」と犬のように走ってくる後輩を見て、自然と頬が緩む。あいつもこれくらい可愛げがあればいいのだが。

「聞きましたよ！ 昨日、大変だったらしいっすね」

「なんで知ってんだよ」

「報告書を見た店長が先輩のこと哀れでいました！」

山田の言う通り、昨日は本当にきつかった。

うちの場合、夜勤の仕事といえば、カメラで客の行動を監視したり清掃をしたりと、比較的楽な内容が多い。店長も店長でゆるい人なので、こちとらゆったりと仕事ができるのだ。

それが、昨日は酔っぱらい集団がやってきて、そのアルコールで舐まれた体でノズルを触り出したので、その対応に追われる羽目になった。しかも、酔っぱらいAの対応をしている隙に酔っぱらいBがノズルを引っこ抜いて踊ろうとするので、「危険です！」と「ガソリンスタンドじゃ踊れません！」を馬鹿みたいに連呼しなければならなかった。そして、なんとか酔っぱらいどもをノズルから引き離れたかと思えば、やつらはゲロとその他を撒き散らしてふらふらと去って行ったのだ。もちろん、その処理は夜勤の仕事である。

ぼんやりと昨日のことを思い返していれば、山田がなにやら鞆から取り出して、俺にそれを差し出してきた。なんだとそれを広げれば、どうやら一枚の紙のようである。中央には、モデルと疑うようなスタイル抜群の美男子が描かれており、その横には、実に見覚えのある黄、赤、緑が並んでいた。

「小六の娘が描いてくれたんです！」

「ガソリンスタンドで働く……誰だこいつ？」

「もう！ わかるでしょ？ 俺っす、俺！」

「この絵のどこにおまえがいるってんだ」

「先輩～！ いじわる言わないで下さいよお！ 娘、言ってくれたんですからね？ ガソリンスタンドで働くパパ、世界一かっこいいって！」

そこで、ようやく合点がいった。なるほど、いつもいそいそと帰るこいつは、今日、自慢話をするためだけに俺を待っていたらしい。なんてやつだ、と後輩を見れば、つい数分前までは可愛げしかなかった男が、今度は妙に憎たらしく見えた。

だが、山田はそんな繊細な先輩の気持ちすら察しようとせず、平然と聞いてくる。

「先輩、なんかいい教えとかありませんか？」

「はあ？」

「こう、大人が子供に言ってやれるような教訓とか名言とか伝授してください！」

「ないなあ」

「先輩～！ 先輩なら、息子さんになんて言ってやります？」

知らねえよ。うるせえな。

思わずそう口走りそうになった。

そもそも、息子と録に会話をしない俺が、何かあいつに言うなんてこと、あるはずがない。ないのだが、ふと今朝のことを思い出した。それは、例のドラマを見て思ったことである。

「俺は、馬鹿でもいいから真面目に働けよ、と言うかな」

「それが名言……？」

「イワンの馬鹿つつ一話を知ってっか？」

「何ですか？」

「ロシアの民話なんだけど、イワンていうやつが馬鹿すぎるあまり、悪魔の策略すりゃ覆しちゃまう、て話だ」

「先輩……つまり？」

「なあ、山田。世の中って、阿保みたいだよな」

「はい？」

「正直者が馬鹿を見る世界。阿保だろ」

「……」

「だがな、馬鹿でも真面目に働いてりゃ、食いつぼぐれることはねえ。名誉とか富とか、そんなものに狂わされるくらいなら、馬鹿でもいいから必死に生きてほしい。そーゆうこった」

「先輩って……やはり、元ヤンっすよね……」

必死に教育論を語ってやれば、場違いの感想が返ってくる時きた。妙にかつての舎弟に似ているこの後輩を見ていると、時代錯誤もいいところに「教育」してやりたくなる。そうなる前に、さっさと帰れと犬を追い払うように手を振れば、山田は時計を見てはっとして、慌て走り去っていった。

昨日は散々な夜勤だったから今日こそは平和であれ、とそう思っていれば。

事務所の時計が1時27分を指すとき、普段は静かな室内に電話が鳴り響いた。差出人は妻。一回切れたそれは、二回目のコールに入っている。テーブルの上で震えるそれを見ながら、まるで体が石になったかのように、しばらく動けなかった。

イレギュラーな時間帯の連絡というのは、昔から嫌なものだと決まっている。俺の場合は電話をかけさせる方だったが、立場が変わった今、それを受けとる側になったようだ。

いや、まさか。あいつに限ってそれはない。

そう思うのに、ようやく取れた三回目の電話口で、俺の声は震えていた。

「どうした？ なにかあったか？」

「遼太郎が！ 遼太郎が特待生を取り消されるかもしれないっ！ 遼太郎が、学校やめなくちゃならないかもしれないの！」

電話の向こうで、妻が泣いていた。

咽び泣く彼女を宥めながら、話を聞く。曰く、昨日の22時くらいに、学校から連絡があったらしい。内容は、遼太郎がカンニングをしていたとのことで、問題行動を起こした遼太郎は特待生維持が難しいと言われたそうだ。

今までの息子の頑張りが台無しにされたことが、妻は悲しいようだ。とりあえず。明日の保護者面談には俺が行くと答えた。

翌日、一睡もせずに俺は遼太郎の学校へ向かった。話し合いの為される教室に着いた時には、すでに校長と担任、そして遼太郎が揃っていた。

第一声として、謝罪の言葉を口にする。

「謝る必要ないよ」

拗ねたようにそう言う遼太郎の顔を、久しぶりに見た。少し大人びているようで、やはり相変わらず子供のままだった。

「俺はカンニングはしていない。カンニングペーパーが入っていたとか言うけど、俺の筆跡じゃない」

「そういうことなら先生！ ちゃんと調べてください！ 息子はそういうことはしません！」

「そこが問題なんじゃありません！」

担任が勢いよく机を叩いて叫ぶ。

「問題は、彼が職員室の様子をネットにあげたことです！」

「あげてないって！」

すかさず息子も叫ぶ。どうということかと事態を掴めずにいる俺に、校長が説明した。

曰く、筆跡も確認せずに犯人扱いされたことに腹を立てた遼太郎が、スマホで撮影しながら職員室に乗り込み、「皆さん～、ここが生徒に濡れ衣を着せる先生たちの巣で一す」と配

信を匂わせる行動を取ったというのだ。実際はふりだったのだが、ネット問題が敏感な今、遼太郎の行動は問題と見なされたみたいだ。

全く。俺が昭和のヤンキーなら、息子は令和のヤンキーではないか。俺が馬なら遼太郎は鹿。全く違う生物なのに、馬鹿という点ではよく似ている。

まるでかつての自分の生まれ代わりのような男を眺めていると、校長がわざとらしく咳払いをした。

「えー。まあ、カンニングを疑った件は、こちら側も悪かったと思います。しかし、遼太郎くんがしたことは、一步間違えば大問題になりかねない。停学処分すら有り得る行動です。そこで……提案なんですけど……今回は見逃す代わりに、特待生は今年度までとさせてくれませんか？　じゃないと、周りの生徒にも示しがつきませんので」

校長がハンカチで額の汗を拭いながら言う。だが、遼太郎は納得していないようだった。

「おかしいでしょ！　ネットにはあげるつもりなかったけど、ああでもしないと俺がカンニングしたと決めつけたままだったろ！」

「おい、落ち着け、遼太郎」

「親父もなんか言ってくれよ！　親ぶって学校に出てきたんなら、たまには親らしいことしてくれよ！」

遼太郎が俺の肩を掴みながらそう懇願してくるのを見て、俺は静かに頷いた。確かに、今こそ親らしいことをしてやるタイミングなのかもしれない。

俺は先生たちをしっかりとこの目に写し、そして、その場で深く、頭を下げた。

「この度は、うちの息子が申し訳ありませんでした」

頭を下げているため遼太郎の顔は見えないが、その声色が動揺しているのはわかる。それでも、先生たちに言われるまで俺は顔を上げなかった。

せり上がってくる想いを堪えるために強く握りしめた拳は、喧嘩より遥かに痛かった。

「特待生じゃなくなったら、学校通えないだろ。私立なんて」

帰り道、遼太郎が不安げに言った。

「通えるさ。そのために俺は働いているんだからな」

横から息を飲む音が聞こえてくる。しかし、それも数秒後には、「なんで頭下げたんだよ」という不満に変わった。

もしかしたら、遼太郎はくたびれたダサいおっさんではなく、かつての血気盛んな暴れ馬を見たかったのかもしれない。ところが、やってきたのはすっかり丸くなったペコペコ頭だ。それにガッカリしたのだらう。

そのダサさがいかにこいいかは、親になった今、俺はよくわかる。だが、今説明するには、遼太郎は青すぎるし、あまりにも俺たちの間でコミュニケーションが不足している。だから、代わりに言ってやった。

「生き残れる馬鹿って最強なんだぞ」

「はあ？」

わけがわからない、と横で遼太郎が喚く。そんな息子の頭を撫でてやれば、勢いよく振り払われた。

それはそれは騒がしい帰り道。

息子がどうやらただの馬鹿ではないらしいことに、こいつも俺の血を引いてやがると、ちょっとだけ嬉しくなったのだが。もちろん、そのことは当分秘密である。